2020
2
No. 687

國學院大學學報

「紀元節、大倭を懐ひて詠める」

天雲のそこひにこもる雷（カミ）が音（オト）
四方に響（トヨ）みて、國は榮えぬ
（「遠やまひこ」）

釈　迢空

国学院大学　令和２年２月20日㈭　定期号（毎月20日発行）１部20円
［発行］国学院大学　［編集］総合企画部広報課　〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目　［電話］03（5466）0130　［FAX］03（5466）0528

祭　儀　■ **月次祭・祈年祭**　３月２日（月）　午前10時　神殿　■ **卒業奉告祭**　３月21日（土）　午前10時　神殿

「ふるさと」を守る祈り

―10度目の「３・11」を前に―

を本教　多たあれらどと礼教学域　り広と大神息とた向後の浜はのたの追にたはが　強５がし10明悪発巡

間もなく10度目の「３・11」がってくる。平成23年３月11日に生した東日本大震災は、戦後最の自然災害として死者・行方不1万８４２８人（令和元年12月日現在、警察庁まとめ）を記録た。各地で「ふるさと」の復興進むなか、復旧すらままならず万人近くが不自由な避難生活をいられているのも事実だ。被災地ではさまざまな取り組み繰り広げられている。その中に、地域の中核として機能してき神社の祭礼や民俗芸能の復活、守るべき「ふるさと」の姿をい求める人々もいる。原発事故ため大半が帰還困難地域となっ福島県浪江町の民俗芸能「請戸（うけど）田植え踊」復活に尽力したの、「国学院大学院友会」福島県通り支部長を務める大国魂神社山名隆弘宮司（平27修・123期博史他）。悲嘆に暮れる被災者とき合ったこれまでの活動を「ひすら『よみがえり』を祈るこ」と述懐。また、山名宮司の子である隆史禰宜（平３修・99期専攻他）は、現地で続ける千度祓を通じて「神道界や国学院大いったネットワークが想定外にがり、非常に驚かされた」と振返る。

東北をはじめ全国の災害被災地に入り、支援と研究を続ける国院大学神道文化学部の黒崎浩行授（宗教社会学）は「神社の祭や民俗芸能が被災した『ふるさ』を守り、忘れないためのよりころとなっている」と指摘。さに、「災害発生時の避難所となるよう検討している宗教団体もるが、施設の事情や人的要因のめ受け入れに消極的なところもいのが実情」と課題を挙げる。災害からの復興に果たす「宗」の役割が注目される中、東日大震災での実例から今後の課題探る。【４、５面に関連記事】

決意新たに「未来へ躍進」成人加冠式

国学院大学渋谷キャンパスで１月11日、「令和」になって初めて執り行われた成人加冠式。主催の神道文化学部など各学部の新成人学生を代表する男女各25人が参列し、男子学生は衣冠や狩衣、女子学生は正服など普段は着る機会のない華やかな衣装を身にまとい、新成人としての決意を新たにした。

加冠式の開催は今年で13回目。新成人は院友神職会東京都支部から寄贈された装束を着用した。

式典では、初めに「加冠の儀」が１２０周年記念２号館祭式教室で行われ、加冠役を務めた茂木貞純神道文化学部教授ら４人の教員から、男子学生には冠や烏帽子、女子学生には釵子（さいし）や額当（ひたいあて）が一人一人の頭上に授けられた。

西岡和彦神道文化学部長・教授が祝辞を述べると、新成人代表の小林まりんさん（神文２）が「令和最初の新成人として、日本の心と文化を次世代に伝えていかなければいけない立場です。未熟な私たちですが、これまでお世話になった方々に恩返しができるよう、この素晴らしい学び舎で友人たちと切磋琢磨し、夢や目標に向かい進んでいきます。自分自身の行動に責任を持ち、未来へ躍進していくことを誓います」と答辞を返した。

続いて神殿に移動し、「大学神殿奉告の儀」が行われ、祭員による修祓の後、セレスト・ハルトさん（神文２）が誓詞を奏上し、全員で拝礼した。

その後、祭式教室に戻り、学生有志が神楽舞「浦安の舞」を披露して新成人を祝福する「祝賀の儀」が行われた。【２面に関連記事】

みはるかすもの

ファミリーレストラン最大手のすかいらーくホールディングスが１月、半世紀にわたって続けてきた24時間営業を、４月までに国内全店でとりやめると発表した。働き方改革が叫ばれる中、この話題には肯定的な意見が目立つ一方、惜しむ声も。部活動の帰り道や試験勉強に遅くまで利用したという読者も少なくないことだろう▼脱・24時間営業の動きは、全国に５万以上の店舗があるコンビニ業界でも。経済産業省の有識者会議は、人手不足などが社会問題化しているコンビニのあり方について、24時間営業や休日を地域性や経営環境に応じて柔軟に見直すことなどを報告書にまとめた▼国内にコンビニが生まれて40年あまり。いつでも食料品や日用雑貨が手に入る場だったコンビニは、顧客の期待以上に多岐にわたる機能を兼ね備えて成長を続けてきた▼宅配便の発送や受け取り、ＡＴＭでの現金の引き出し、公共料金などの収納代行、住民票の発行などの行政サービスの代行までも。近年は、防犯、防災面での社会的な役割が期待される▼労働人口が減り、働き方が見直される一方、利用者は全国一律にいつでも享受できるサービスに期待し続けている。固定化された「当然の便利さ」という夢想を改める大きな転換点に立たされていると言っていいだろう▼今年７月には、すべての小売店で買い物をする際のプラスチック製レジ袋が有料化される。ここでも生活の中の当たり前が大きく変わりそうだ。

主な内容　**２面**／成人加冠式　**３面**／令和元年度 補正予算成立　**４・５面**／特集 ふるさとを守る 災害と宗教
６・７面／珠玉の７作品を紹介 高校生向け２コンテスト、インフォダイジェスト
最終面から K:DNA　**Ｉ面**／第３回 古事記アートコンテスト 特選に村山さん（東海大）、野田さん（熊本・大津高）

KOKUGAKUIN UNIVERSITY 140th 1882–2022

「大人になった実感」期待と希望を胸に成人加冠式

新成人の女子学生には叙子や額当が授けられた（加冠役はヘイヴンズ・ノルマン神道文化学部教授）

「冠をかぶった後では、大人になったという実感があります」

国学院大学渋谷キャンパスで1月11日、執り行われた成人加冠式で誓詞を読み上げる大役を務めたセレスト・ハルトさん（神文2）は、式を終えると晴れやかな表情に。神職を目指して学んでおり、「位の高い神職が着用する装束を身に着け、ご神前で誓詞奏上させていただきました」と感慨に浸っていた。

式典で答辞を述べ終えた小林まりんさん（神文2）は「自分がきちんとした大人になっていくんだなということを改めて実感しました。これからも、もっと大人として責任と自覚をもって生きていこうと思います」と決意を語った。

「祝賀の儀」で新成人を代表し、記念品を受け取った矢島祥多さん（神文2）は「冠を授けられて、新成人という気持ちが一層感じられてきました。貴重な機会に参加させてもらい、ありがたく思います」と感謝し、式典を見守った母、早苗さんは「特別な緊張感を伴った加冠式を迎えられて、大変うれしく、感動しました。息子がいつもより大人に見えました」と目を細めた。

受付係を務めた山口茜さん（神文4）は式典を滞りなく終え、「平安時代の様式である成人加冠式を通して、成人になる心構えを改めて考えてもらえる機会にしたいと思いながら準備してきました。毎年、新成人学生の顔は輝いています。期待と希望が表情にあふれていて、いいですね」と話した。

神殿で誓詞を奉上するセレスト・ハルトさん

経済学会懸賞論文 最優秀賞に中国さん（経営4）

国学院大学経済学会が主催する「経済学会懸賞論文」の今年度の受賞者が決定し、1月22日に表彰式が行われた。

この懸賞論文は、経済・経営・会計など（経済ネット各コースも含む）に関するテーマの下、経済学部生を対象に昨年12月上旬に募集を行った。今年度は12件の応募があり、経済学部全教員による厳正な審査のもと、最優秀賞1本、優秀賞2本、佳作3本が選ばれた。

表彰式では、経済学会の橋元秀一会長（経済学部長・教授）が、今年4月に経済学部が経済学科、経営学科の2学科体制に移行し、4年間の学修の中で卒業論文や卒業レポートが必修になることに触れ、「懸賞論文の中で（4年間の）学びを形にして成果を生み出してくれた営みの延長線上に新しい学部がつくられる。皆さんの成果が方向性の大切さを示してきた。皆さんの頑張りに敬意を表したい」と挨拶した。

受賞者は次の通り（敬称略）。

最優秀賞＝中国奏人（経営4）「福祉評価の多元的枠組み―潜在能力アプローチの現代的一展開―」

優秀賞＝小林ななみ（経4）「非財務情報が企業価値向上に与える影響～日本の製造業におけるSDGs戦略～」▽芝田圭汰（経ネ4）「日本におけるドローン市場の拡大と、農業分野での普及課題」

佳作＝及川浩輝（経4）「病院の赤字要因の考察～会計数値の比較による赤字病院と黒字病院の相違～」▽坂崎瑞穂（経4）「欧州通貨統合の展望～ユーロ圏の非対称性と地域格差を乗り越えられるのか～」▽増渕公志（経営4）「確定拠出型企業年金が財務諸表に与える影響～リスク分担型企業年金導入企業の分析を通じて～」

人間開発学部学部長賞に13人

令和元年度人間開発学部学部長賞の受賞者が発表され、今年度は13人の同学部生が選ばれた。

授賞式は1月15日、たまプラーザキャンパスで行われた＝**写真**。受賞者は成田信子人間開発学部長・教授（副学長）から表彰状と副賞・記念品を受け取った。

同賞は、同学部の理念に基づき、優れた実践的活動を表彰することを目的として、平成23年度に設置された。

受賞者は次の通り（敬称略）。

◇**初等教育学科**▼4年：中西貴聖▽山縣直大▼3年：上田由紀子▽小針柚香▽佐々木汐里▽紫牟田萌▽鈴木祐人▽長井友花▽東優花▼2年：山本未由

◇**健康体育学科**▼3年：宮里麻佑

◇**子ども支援学科**▼3年：平野愛▼2年：竹内優芽

一般入試　A日程入試 3日間で約1万4千人が受験

国学院大学の一般入学試験の志願者は1月24日現在、2万1000人を超えた。2月2日から4日まで実施されたA日程入学試験には、昨年度より600人余り少ない1万3862人が出願。入学試験は本学会場（渋谷・たまプラーザ）のほか地方8会場でも実施。感染が拡大する新型のコロナウイルスの影響を受けて、マスクを着用する受験生が例年以上に多く見られたが、大きなトラブルなく3日間の試験を終えた＝**写真**。合格発表は2月14日。

なお、本学の一般入学試験は、2月26日にB日程入試が行われる。センター試験利用型入試では、V方式（Ⅱ期）の出願を3月3日まで受け付ける。

復旦大学短期留学を中止 新型肺炎の影響を考慮

国学院大学は1月28日、2月16日から3月14日までの日程で実施する予定だった復旦大学（中国・上海）での春期短期留学を中止することを決めた。中国国内をはじめ世界各国で感染が拡大する新型コロナウィルスの影響を考慮したもので、参加予定だった17人の学生には1月28日、国際交流課から通知された。

税理士試験 合格者が飛躍を誓う

令和元年度（第69回）税理士試験の結果が、昨年12月に発表された。本学関係者では大学院修了生1人が難関を突破した。今年度大学院修了予定者では、1人が所定の試験に合格し、修士学位論文の審査などにより税理士資格を得られる予定となった。

1月25日には、多くの教員や卒業生、後輩の大学院生が集まり、渋谷キャンパスで合格者の祝賀会が開かれた。本学大学院経済学研究科では、平成22年度にキャリアコースを開設して以来、今年度までに30人以上の税理士試験合格者を輩出している。

合格者、合格候補者は「合格を家族が喜んでくれ、親孝行ができた」「ようやく税理士としてのスタートラインに立てる。社会貢献をして（学恩を）返していきたい」などと話した＝**写真**。

教職員人事

採用

◎大学事務局◇総務部総務課嘱託▽厚海正嗣

以上、令和2年1月1日付

令和元年度 補正予算成立

令和元年度学校法人国学院大学補正予算は、1月30日の理事会・評議員会で承認、成立した。

◇**資金収支予算**

資金収支予算は、会計年度中のすべての収入および支出の内容と支払資金の顛末を明らかにすることを目的としている。

◇**事業活動収支予算**

事業活動収支予算は、①教育活動②教育活動以外の経常的な活動③①②以外の活動に対応する事業活動収入および事業活動支出の内容を明らかにするとともに、当該会計年度において基本金に組み入れる額を控除した、当該会計年度の諸活動に対応するすべての事業活動収入および事業活動支出の状態を明らかにすることを目的としている。つまり、「3つの活動に対応する事業活動収入および事業活動支出の内容を明らかにする」＝区分経理、「均衡の状態を明らかにする」＝収支の均衡＝を主な目的としている。

詳細は本学HPに掲載している。（財務部経理課）

資金収支補正予算書

平成31年4月1日から令和2年3月31日まで

（単位:百万円）

収入の部

科目	補正予算	予算	増減
学生生徒等納付金収入	13,258	13,141	117
手数料収入	716	683	33
寄付金収入	449	419	30
補助金収入	2,271	2,242	29
資産売却収入	0	0	0
付随事業・収益事業収入	188	150	38
受取利息・配当金収入	191	122	69
雑収入	427	399	28
借入金等収入	596	596	0
前受金収入	2,481	2,388	93
その他の収入	5,067	4,705	362
資金収入調整勘定	△2,769	△2,556	△213
当年度収入合計	22,875	22,289	586
前年度繰越支払資金	9,453	7,598	1,855
収入の部合計	32,328	29,887	2,441

支出の部

科目	補正予算	予算	増減
人件費支出	9,595	9,358	237
教育研究経費支出	4,025	4,042	△17
管理経費支出	1,399	1,264	135
借入金等利息支出	12	15	△3
借入金等返済支出	820	820	0
施設関係支出	3,416	4,103	△687
設備関係支出	339	382	△43
資産運用支出	4,522	2,428	2,094
その他の支出	401	261	140
予備費	499	499	0
資金支出調整勘定	△233	△150	△83
当年度支出合計	24,798	23,023	1,775
翌年度繰越支払資金	7,530	6,864	666
支出の部合計	32,328	29,887	2,441

事業活動収支補正予算書

平成31年4月1日から令和2年3月31日まで

（単位:百万円）

		科目	補正予算	予算	増減
教育活動収支	事業活動収入の部	学生生徒等納付金	13,258	13,141	117
		手数料	716	683	33
		寄付金	172	142	30
		経常費等補助金	2,251	2,222	29
		付随事業収入	188	150	38
		雑収入	427	399	28
		教育活動収入計	**17,012**	**16,737**	**275**
	事業活動支出の部	人件費	9,615	9,293	322
		教育研究経費	5,696	5,660	36
		管理経費	1,457	1,402	55
		教育活動支出計	**16,768**	**16,355**	**413**
教育活動収支差額			**244**	**383**	**△139**
教育活動外収支	事業活動収入の部	受取利息・配当金	191	122	69
		その他の教育活動外収入	0	0	0
		教育活動外収入計	**191**	**122**	**69**
	事業活動支出の部	借入金等利息	12	15	△3
		その他の教育活動外支出	0	0	0
		教育活動外支出計	**12**	**15**	**△3**
教育活動外収支差額			**179**	**106**	**73**
経常収支差額			**423**	**489**	**△66**
特別収支	事業活動収入の部	資産売却差額	0	0	0
		その他の特別収入	312	312	0
		特別収入計	**312**	**312**	**0**
	事業活動支出の部	資産処分差額	98	22	76
		その他の特別支出	81	0	81
		特別支出計	**179**	**22**	**157**
特別収支差額			**133**	**289**	**△156**
［予備費］			499	499	0
基本金組入前当年度収支差額			57	279	△222
基本金組入額合計			*△4,558	△5,411	853
当年度収支差額			△4,501	△5,132	631
前年度繰越収支差額			△3,629	△5,560	
基本金取崩額			0	0	
翌年度繰越収支差額			**△8,130**	**△10,692**	
（参考）					
事業活動収入計			17,515	17,171	344
事業活動支出計			17,458	16,892	566

※■第1号基本金…37億5,800万円
教育の質向上のために取得した固定資産の価格
■第2号基本金…3億円
教育の質向上のために将来取得する固定資産取得に充てるもの
■第3号基本金…5億円
基金として継続的に保持しかつ運用する資産となるもの

院友会が新年交歓会

国学院大学院友会による恒例の「新年院友交歓会」が1月25日、渋谷キャンパス有栖川宮記念ホールで行われた。挨拶に立った吉田茂穂会長は、本学が総合3位に入った箱根駅伝に触れ「国学院大学が自分の中で大きい存在だったことを引き出してくれた」とし、「後輩たちが頑張っている姿が院友のエネルギーになっている。これからも輝き続けていただきたい」と述べた。

懇談の合間には、院友会による学術・スポーツ振興基金の目録の贈呈があったほか、恒例の福引き大会では、落語家の三遊亭遊吉さん（昭57卒・90期文Ⅱ）の軽妙な進行で会場が大いに盛り上がった。

団体・個人の成績

柔道部＝モナコ国際柔道大会が昨年12月8日、モナコで行われた。近年の成績が評価され、同国柔道連盟からの招待を受け参加した柔道部は、1回戦から準決勝までフランスから参加したチームを退けた。決勝はロシアナショナルチームに3―4で敗れ準優勝だった。

陸上競技部＝第25回天皇盃全国都道府県対抗男子駅伝競走大会が1月19日、広島市で行われ、陸上競技部の3選手が郷土のたすきをつないだ。3区に出場の浦野雄平選手（経営4・富山県代表）は、7人抜きの好走で24分10秒（区間13位）をマーク。7区では藤木宏太選手（神文2・北海道代表）が38分01秒で区間15位、中西大翔選手（健体1・石川県代表）が38分06秒で同20位だった。

第74回香川丸亀国際ハーフマラソン大会は2月2日、香川県丸亀市で行われ、陸上競技部の6選手が出場した。青木祐人選手（経ネ4）は国内の学生歴代8位となる1時間1分32秒で14位。6人中4人が自己ベストを更新し好記録が続出した。

神奈川マラソンが2月2日、横浜市で行われ、ハーフマラソン女子で久保田かえで選手（経ネ3）が1時間16分06秒で優勝した。

卓球部＝関東学生卓球連盟が主催する第54回会長杯争奪卓球大会が昨年12月14、15日、駒沢屋内球技場（世田谷区）で行われた。女子ダブルスでは、小畑美菜（初教1）・髙橋沙希（法1）ペアが3―2で黒坂理帆（初教3）・小林美結（経ネ2）ペアを下し優勝した。女子シングルスでは髙橋選手が準決勝で敗れ3位だった。小畑・髙橋ペアは、10月に行われる第87回全日本大学総合選手権大会個人の部の出場が内定した。

スポーツチャンバラ部＝全日本学生大会が昨年12月22日、小田原アリーナ（神奈川県小田原市）で行われ、男子団体で優勝。男子新人の部のグランドチャンピオンに長剣フリー、長剣両手でも優勝した加藤知大選手（神文1）が輝いた。そのほか、男子有段の部楯長剣（有級）で大田原嶺選手（史2）が優勝した。

学問ノ道 第24回

折口信夫の薫陶を受けた 国学院漢学の継承者 藤野岩友

藤野岩友

折口信夫から国文学の薫陶を受け大正11年に卒業した藤野岩友（1898～1984）は、漢学の復興を標榜して創建された大東文化学院高等科の第1期生として3年の修養を重ね、昭和2年に修了した。藤野は修了と同時に、服部宇之吉、小柳司気太らによって受け継がれた国学院漢学の継承者として母校に戻った。折口の学問を中国古代に当てはめてみようとする試みは、中国古代文学を広い視野のもとに置き、その誕生の来源から展開までを追求しようとする意欲的な研究である。

その学風は、原典の一字をもゆるがせにしない着実な訓詁とその背後に広がる文化的な事象をいかに結びつけるかという、地道な漢文文献への対峙と自由な発想とを併せ有している。文学の源流に宗教的な祭祀を想定し、その展開として文学的な成形を示す研究は学位論文『巫系文学論―楚辞を中心として―』（昭和26年初版）として結実した。この研究の構想は、文学の原委を考察するとき、中国古代のいわゆる宗教祭祀を担った「巫」「祝」「史」の役割、とりわけ「巫」の地位を明らかにすることで、文学の発想に与えた影響を解き明かそうとする斬新なものである。とくに中国文学の二大源流の一つとされ、宗教的色彩の濃い「楚辞」に当てはめ解明した。

代表的著作には、他に『中国の文学と礼俗』（昭和51年、角川書店）『楚辞』（昭和42年、漢詩大系三、集英社）『角川漢和中辞典』（貝塚茂樹・小野忍と共編、昭和34年）などがある。

輪読や輪講を中心に進められる大学院の授業は原典を精確に訓詁する手法で文字の背景にある発想を追っていき、文学が何を言おうとするかを闡明する手法を採った。板書は筆圧の強い楷書で、講義に必要な原典は原稿用紙に手書きされた。複写機の使用を申し出たが、数名の授業の場合には人数分をご自身が書写された。受講生には宝物を得た思いがした。ゆっくりと受講者の理解を促すように話される講義は、今もその温容とともに脳裏に蘇る。

京都大学、慶応義塾大学、明治大学、大東文化大学でも教鞭を執った。本学学生部長、図書館長、折口博士記念古代研究所長を歴任した。その住まい旧淀橋区（現・新宿区）柏木、また「歳寒くして松柏の凋むに後るるを知る」の古語にちなみ「柏軒」と号した。

文学部教授（特別専任）赤井益久

ふるさとを守る

災害と宗教

未曾有の災害となった東日本大震災。
被災直後の生活もままならない状況下でも祭礼や民俗芸能に取り組んだ人たちは、この経験で何を学んだのか。
南海トラフ地震や首都直下地震も取りざたされる今、「先人の教え」に耳を傾けてみたい。

インタビューの詳細は、本学ホームページ内「国学院大学メディア」に掲載。

東日本大震災から半年後の「奇跡の一本松」。一度は枯死したが、モニュメントとして「よみがえり」を果たした＝平成23年9月、岩手県陸前高田市（産経編集センター提供）

福島県浪江町の「請戸の田植え踊」復活を支える

ひたすら「よみがえり」を祈る

山名 隆弘 大国魂神社宮司（昭39卒・72期史、平27修・123期博後史）

「3・11」では、家族を亡くして嘆き悲しむ知人を目の当たりにして、「神職に何ができるのか」と悶々とした。そこで思ったのは「よみがえれ」ということ。震災で犠牲となったすべての命の「よみがえり」を願う思いが民俗芸能の復活支援や千度大祓（※）の斎行につながった。

「請戸の田植え踊」は（原発事故の影響で避難を余儀なくされている）福島県浪江町に鎮座する苕野神社で奉納される踊りだが、東京に避難していた保存会の会員が踊りの写真を探しているという情報を知り、復活の手伝いを思い立った。さっそく連絡を取り、震災の年の8月に予定していた院友会浜通り支部総会で披露してもらう段取りをしたが、分散避難していた踊り手の子どもらが稽古のために集まった日は今も忘れられない。

その後、民俗芸能学会福島調査団長を務めるなどして民俗芸能の調査・保存に尽力していた懸田弘訓さんに協力を仰いで衣装や道具を整え、迎えた本番の日には県内外に離れて暮らす浪江の人たちも集まり、涙を流して喜んでくれた。

それを皮切りに、子どもたちは伊勢神宮、明治神宮、出雲大社などで奉納を経験。避難指示の一部解除を受けて一昨年には苕野神社跡地で奉納した。津波で流され何も残っていない場所だが「ふるさとで踊りたい」との思いは強かった。今年も2月16日に奉納した。

踊りの復活に関わって身にしみたのは、「もう一度できる」という民俗芸能習い覚えた者たちの喜び。奉納が終わって「また来年！」と希望を持って前進する気持ちもある。そして、踊りを通して在りし日のふるさとを懐かしく思い出す人々の姿。それは第三者が見ても清々しく、まさに「よみがえる」心地になれた。

年長の女性陣が着付けをしたりおしろいを塗ったりして家族ぐるみで踊りを支え、連綿と踊りを続けてきた。震災後に生まれた幼子が「あたしもやりたい！」といって踊りの仲間に入ってくる。小さな着物を仕立ててもらい、踊る姿を目の当たりにすると、「民俗芸能はエネルギーを持っている」と思わざるを得ない。

大災害に直面して神職ができることは何か。ひたすら「よみがえり」を祈ること。祈りが通じるまで祈ることしかないと、東日本大震災を経験して痛感した。

もう一つ忘れられないのは、大災害の時に学問が大切だということ。日頃から学んで学術的に冷静に分析することを身につけておけば、パニックに陥ることも防げる。いつどこで東日本大震災と同じような災害が起きるかもしれない。国学院大の学生には、日常の心構えとして考えてもらいたい。（談）

地元・福島県浪江町で復活奉納された「請戸の田植え踊」＝平成31年2月17日（黒崎教授提供）

※**千度大祓**　いわきでの千度大祓は100人の神職が10巻の大祓詞を読み上げる

福島県いわき市で「千度大祓」を斎行

想像以上に広がった支援の輪

山名 隆史 大国魂神社禰宜（平2卒・98期史Ⅱ、平3修・99期神専攻）

東日本大震災の直後、「被災地で宗教に関わる者として何かしなくては」と誰もが思っていた。震災で20万匹の魚が死んだ水族館「アクアマリンふくしま」が「海の日」を目指して復帰宣言したのに合わせ、犠牲となった生きとし生けるものの生命力の「よみがえり」を願う思いと「放生会」（※）をミックスして立案したのが千度大祓だ。

神道青年全国協議会の理事を震災直前までしており、そのネットワークを通じて大祓の趣旨を説明したところ、余震、原発事故による放射線などの問題があるにもかかわらず愛知、富山、神奈川などから多くの人が集まってくれた。阪神大震災を経験した生田神社（神戸市）の大祓の御神火を篝火として焚き、その前で千度大祓をやりたいという話が出たが、それを実現させてくれたのが兵庫県の神道青年会だ。顧問を務める伊弉諾神宮の本名孝至宮司は全国的に知られた方で、大祓の様子を発信してもくれた。

2回目には相当な覚悟が必要だったが、先輩方の「手分けしてやろう」という言葉に背中を押される形で「10年やろう」ということになった。国学院大学神道文化学部の教員が肝煎りとして助力してくれ、2回目から学生も参加するようになった。神道界や国学院大といったネットワークは想定外に広がり、非常に驚かされた。今年は7月19日に予定しているが、最初の段階で参加した学生にも集まってもらい、復興の足跡を確認しながら斎行できればと考えている。

いわき大祓の会が主催するのは今年限りの予定で、今後は福島県神社庁に引き継ぐほうがいいのではないかと考えている。

双葉地区に新しくできる復興祈念公園に隣接する八幡神社に、全国八幡会から頂戴した御神輿を納めることも考えている。そこを遥拝所のような場所とし、帰還できない神社の神輿として担いでもらえば、伝統の祭りを守ることもできる。

国学院大の学生が千度大祓に参加してくれるのは非常にありがたいこと。この経験を自分で咀嚼し、自分たちの将来に役立ててもらうことを望む。（談）

福島県いわき市で斎行された9回目の「千度大祓」＝令和元年7月14日

■**千度大祓と国学院大学**

いわき大祓の会の趣旨に国学院大学の教員らが賛同し、2回目の斎行となった平成24年から学生らとともに「千度大祓」に参加している。参加に際しては、事前に現地入りし、地元神職らの案内で被災した神社などを見学。震災の記憶風化を防ぐとともに、防災意識の向上にも役立てている。

※**放生会**　仏教思想に基づく供養の行事だが、大分・宇佐神宮、京都・石清水八幡宮、福岡・筥崎宮など八幡神を祀る神社でも斎行されている

祭礼、民俗芸能を「よりどころ」に

「寄り添う姿勢」強調 ――黒﨑教授

国学院大学神道文化学部で宗教社会学の教鞭を執る黒﨑浩行教授が東日本大震災の被災地を初めて訪れたのは、発生から1カ月余りたった4月30日。同僚教員らと福島県を経由して宮城県気仙沼市に向かった。

以来、震災被災地だけで15カ所を定期的に訪れた黒﨑教授が現地で感じ取ったのは、「神社がコミュニティーの中心として存在している」ことと「祭礼や民俗芸能が『ふるさと』を忘れないためのよりどころになり得る」ということだ。民俗芸能学会福島県支部などの調査によると、震災で途絶えた民俗芸能のうち3分の1が復活したといい、「震災前に失われたものを復活させる取り組みもある」（黒﨑教授）という。復活した祭礼などの現場では、再会を喜ぶ人々の姿が見られ、その光景について黒﨑教授は、「苦しいこと、困っていることなど将来に対する不安も含めて本音の部分を共有し合う場になっている」と分析する。

震災以降、神社界のネットワークを通じた支援の輪も広がり、熊本地震などでも存在感を示した。院友（卒業生）にも現地の神職を中心に復興や支援に尽力する人は多い。本学には「存在の危機の時代」を迎えた現代に警鐘を鳴らす意味も込めて取り組んできた「共存学」の研究があるが、その主旨にもかなう展開を見せているといえそうだ。

近い将来、発生が予想される大規模な自然災害、「ふるさと」を守るために神社界など災害が果たすべき役割について黒﨑教授は、①慰霊・鎮魂の祈り②大自然や神仏に対する畏れの受容③年代・世代を超えての記録・伝承④被災者の受け入れ態勢整備――などを挙げる。しかし、福島の浜通り地方を中心に長引く避難生活によって民俗芸能の担い手不足に悩む地域も多く、境内などへの避難所設置については東京都宗教連盟の加盟団体調査で半数以上が人的要因などを理由に「受け入れ意向なし」とする現実もある。

「被災した現実を忘れたい人もいる」とした上で黒﨑教授は、「研究者は寄り添うことしかできないが、神社界や現地に飛び込んでいった院友らと本学との協力態勢を支えたい」と強調する。

多くの宗教者によって支えられる「ふるさと」を守る祈り。被災地だけでなく、多くの日本人の心のよりどころとなる「ふるさと」で続けられていくことだろう。

くろさき・ひろゆき　専門は宗教社会学。近著に『神道文化の現代的役割―地域再生・メディア・災害復興』（弘文堂）がある。

黒﨑教授が指摘する東日本大震災での実例

■被災神社
4585社（平成23年7月、神社本庁調べ）

■神社が避難所・救援拠点に
紫神社（宮城県気仙沼市）、月山神社（岩手県陸前高田市）、今泉天満宮「にじのライブラリー」（同）

■神社界ネットワークによる救援・支援
神道青年全国協議会、下谷神社（東京都台東区）による仮社殿・鳥居寄贈

■神社再建・祭礼再開・コミュニティー維持
みんなの鎮守の森植樹祭（宮城県山元町の八重垣神社）、集団移転に伴う神輿渡御ルート変更（宮城県気仙沼市の八幡神社）、本学の学生らが神輿渡御に参加（宮城県女川町の熊野神社）、熊本の県立球磨工業高と志岐八幡宮による支援（福島県南相馬市の山田神社）、四社合同神幸祭の斎行（福島県いわき市の諏訪神社など）、「請戸の田植え踊」再開（福島県浪江町の苕野神社）

■慰霊・鎮魂・復興祈願
福島での千度大祓、古谷館八幡神社の慰霊碑（宮城県気仙沼市）

避難所としての「神社」の利点と課題

○ 地域住民に知られた存在である
○ 広い境内、建屋（社殿、社務所など）がある
× 神社そのものが災害危険地域に存在する
× 社殿などが免震・耐震構造ではない
× 鳥居、石灯籠など倒壊の恐れのある建造物がある
× 責任者（神職）が常駐していない

「都市防災」を考える 29日に渋谷学シンポ

国学院大学研究開発推進機構は、令和元年度第1回の渋谷学シンポジウムとして「地域資源を活かした都市防災へ―渋谷東地区と他地域から考える―」を開催する。

シンポ当日は、稲場圭信・大阪大学大学院教授が「都市防災に活かされる地域資源としての宗教」と題して基調講演。その後、黒﨑浩行・本学神道文化学部教授が「被災者の多様性を織り込んだ防災と宗教文化資源の役割―渋谷をフィールドとして―」、熊沢雄一郎・渋谷区危機管理対策部帰宅困難者担当課長が「渋谷区の帰宅困難者対策の現状について」と題して報告する。

日 2月29日(土)
時 13時30分～17時
場 渋谷キャンパス常磐松ホール
料 無料

珠玉の7作品を紹介
高校生向け2コンテスト

国学院大学とスクールパートナーズ（高校生新聞社）による第23回全国高校生創作コンテスト（協賛：国学院大学若木育成会・国学院大学院友会・国学院大学北海道短期大学部、後援：文部科学省・全国高等学校長協会・全国高等学校国語教育研究連合会・日本進路指導協会）と、第15回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト（協賛：国学院大学若木育成会・国学院大学院友会・国学院大学北海道短期大学部、後援：文部科学省・農林水産省・全国高等学校長協会・日本進路指導協会）には、両コンテスト合わせて2万4611点（創作コンテスト1万9852点、伝承文化コンテスト609点）の応募があり、昨年末に部門ごとの入賞作が決まった（学報12月号で既報）。「創作コンテスト」は、『背高泡立草（せいたかあわだちそう）』で第162回芥川賞（2019年下半期）を受賞した古川真人さんも最優秀賞（第9回、05年）に輝くなどの実績がある。今号では、両コンテストで栄冠を射止めた各部門の最優秀賞作品7点を紹介する。

全国高校生創作コンテスト

現代詩の部：「僕と乳房」吉田眞子さん（兵庫・神戸大学付属中等教育学校4年）▽**短歌の部**：徳森大悟さん（鹿児島・ラ・サール高3年）▽**俳句の部**：鈴木萌晏さん（岩手・水沢高2年）

「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト

折口信夫賞：「民具を活用したレクリエーションが参加者に与える影響」中島渚さん（鹿児島・屋久島高3年）＝**地域文化研究部門（団体）最優秀賞**▽**地域文化研究部門（個人）**も受賞▽**地域文化研究部門（団体）**：「イチイからたどる『飛騨のなりたち』―飛騨の伝承文化に学ぶ―」（岐阜・益田清風高 地域研究）▽**地域民話研究部門（団体）**：「こんなんあったけん調べてみた!!―久谷地区・砥部町の伝承たち―」（愛媛・東温高郷土芸能部）▽**地域民話研究部門（個人）**：「日本人と『桜』の伝説について」砂野光咲さん（愛媛・済美平成中等教育学校4年）

第15回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト
折口信夫賞・地域文化研究部門（個人）最優秀賞
民具を活用したレクリエーションが参加者に与える影響

中島渚さん（鹿児島・屋久島高3年）

◆**応募の動機**

2年生の環境コースの研修で屋久島町歴史民俗資料館を訪問した際に民具と出合い興味を持った。屋久島の民具調査が行われた30年後の現状を調査し、その結果から消えゆく民具の活用方法の一つであるレクリエーションを実施し参加者に与える影響を調査した。その調査結果をより多くの人に伝えたいと考え応募した。

◆**内容紹介**

【研究1】民具に関するアンケート調査：民具の認知度、使用、保管、廃棄状況について高校生134人、大人56人を対象に調査した。その結果、高校生が見たことのある民具で多かったのは、餅つき体験やイベントで見たイシウス、キネ、センバで、大人が現在も使用しているのは、タケボーキ、ナタ、クシ、ソケなどだった。しかし、ゴブランプ、クラ、ヒラギワイ、モミトオシなど多くの民具が使われなくなっており、古くなった、置き場所がない、使い道がない―などの理由や使用者の死亡、家の改築をきっかけに廃棄される実態があった。この状況が続けば民具は生活から消え、昔の暮らしを知る貴重な財産がなくなる可能性がある。そのため、消えつつある民具を保存し、新たな活用方法を探ることが重要である。この結果を受け、研究2を実施した。

【研究2】民具を使ったレクリエーション：民具がレクリエーションの参加者に与える影響を探るため、高齢者30人、高校生9人、施設職員5人を対象に民具を活用したレクリエーションを1時間行った。内容はスライドに民具を投影し、使用の有無を○×カードで提示してもらったり、箱の中にある民具の名称を触った感覚だけで当ててもらったりするクイズとした。またグループ活動で思い出のある民具について写真をもとに高校生に語ってもらい、最後にアンケート調査を行った。

レクリエーションの効果として、高齢者にとっては、若い世代との交流の場となり気分の高揚から記憶が再生され、笑顔や口数が増加し、昔の暮らしを教えたいという気持ちを高めた。高校生にとっては、高齢者世代との交流の場となり、民具を活用した良い効果を実感し、昔を知る満足感につながった。施設職員にとっては、昔を学ぶ場となり、日ごろ支援する高齢者を理解するきっかけとなった。また、民具が高齢者に与える効果を実感し、有効な支援の一つとして認識したことが挙げられた。

今回の研究では、使われなくなった民具の活用法として回想法を取り入れたレクリエーションを実施した。その結果、参加した高齢者だけでなく、高校生、施設職員などの第三者にも良い効果が見られた。

◆**今後の課題**

今後の課題としては、レクリエーションで使用する民具の種類を増やしたり、参加者の居住区域を広げたりして効果を検討してみたい。また、民具の新たな活用方法を探り、今後レクリエーションで活用するための民具を収集し保存するための有効な方法も検討していきたい。

地域文化研究部門（団体）最優秀賞
イチイからたどる『飛騨のなりたち』
―飛騨の伝承文化に学ぶ―

岐阜・益田清風高 地域研究

◆**応募の動機**

私たちの学校の敷地にはイチイという木が並んでいる。この木で作った笏（しゃく）を天皇に献上したときに正一位の位を授かったという伝承があり、イチイには「一位」という意味や歴史があることを、「地域研究」の授業で学んでいた。そこで、飛騨の伝承や現在に残る文化の研究を通じて、未知の「飛騨のなりたち」を研究することにした。

◆**内容紹介・今後の課題**

「飛騨のなりたち」を研究するにあたり、「飛騨と中央の関係がどのようであったか」という視点で文献調査を行い、次の5つのテーマに分かれて現地調査を実施した。

①「両面宿儺（すくな）」の伝説：『日本書紀』には、「両面宿儺」という飛騨の怪人が朝廷軍に討伐されたという記述がある。一方、地元の伝承では宿儺は斧を持って出現したとされ、宿儺の開創と伝わる寺院もある。斧には木を切り開き、国を拓くという意味が込められていると考えられ、良き指導者としての伝承が残っている。

②飛騨の馬と紙絵馬：（省略）

③飛騨工：奈良時代の飛騨国は、一部の税が免除される代わりに、毎年多くの男性が木工として徴発され労働に従事した。飛騨工と呼ばれた人々の優れた木工技術は『今昔物語集』に語り継がれている。飛騨工が実際に歩いて都に向かった東山道飛騨支路は、現在も石畳の残っている箇所があり、当時の飛騨工の苦労を垣間見ることができる。

④イチイと一位一刀彫：笏木献上の古例は、現在も天皇陛下即位の際に飛騨一宮水無神社からイチイの笏木を上納する慣例として残っている。また、飛騨では江戸時代に一位一刀彫という伝統工芸が成立した。イチイの素材を自然のままに彫った木工品は、色を使わず木目の美しさを生かしており、寒い土地に育つイチイの素材ならではの特徴がそれを可能にしていた、「八百八狸伝承」は、享保期に松山藩内で起こった家老同士の権力争いが藩主毒殺計画に置き換えられ、享保の大飢饉時に起こった久万山騒動という惣百姓一揆の群が、狗神刑部狸の眷属（けんぞく）である八百八狸のモデルであることが分かった。この点から、久谷地区に伝わる民間伝承の裏には歴史的事実が隠されていることが分かった。

地域の人たちや久谷中生徒からのアンケート結果から、久谷地区の人たちは地元の「衛門三郎伝説」について詳しく知っているが、隣の砥部地区の伝承である「大森彦七伝承」については知らないことが分かった。逆に、砥部地区の人たちは、「大森彦七伝承」については知っているが、「衛門三郎伝説」については知らないとの答えが多かった。このことから、伝承は、現在でも、口伝によって、狭いコミュニティーの中で伝えられていることが分かった。

私たちは、この研究を元に、久谷地区の中学生に久谷への愛着心をより高めてもらおうと考え、「衛門三郎伝説」を紙芝居にして、1年生の総合的な学習の時間に体育館で披露した。今後も、地域に眠っている伝承を掘り起こし、伝承を通して地域の皆さんに元気になってもらう活動を続けていきたいと考える。

⑤飛騨河合と山中和紙：（省略）

以上の調査を進める中で、5つのテーマに共通する背景として、飛騨は山に囲まれた森林の多い雪国であるという地形的・気候的な特徴のつながりを見つけることができた。この環境の中で生まれた人々の暮らしや文化こそが「飛騨のなりたち」であると考える。さらに、伝承文化を継承する担い手が減少しているという現状があった。今まで消えることなく受け継いできた文化を、私たちの手で次に残していきたい。

地域民話研究部門（団体）最優秀賞
こんなんあったけん調べてみた!!
―久谷地区・砥部町の伝承たち―

愛媛・東温高 郷土芸能部

◆**応募の動機**

愛媛県松山市の郊外にある久谷地区は中山間地域で、少子高齢化が進んでいる。この地区には、お遍路さんや狸にまつわる伝承が数多くあり、この伝承を掘り起こすことによって久谷地区を活性化できないかと考え、久谷地区の伝承調査を開始した。

◆**内容紹介・今後の課題**

東温高等学校郷土芸能部は、久谷地区に伝わる四国遍路の元祖・衛門三郎に関する「衛門三郎伝説」、狗神刑部狸（いぬがみぎょうぶだぬき）を頭目とする「八百八狸伝承」、砥部地区に伝わる楠木正成を摂津湊川で討ち取った豪勇・大森彦七に関する「大森彦七伝承」などについて調査した。

調査の結果、「衛門三郎伝説」の最古の文字記録は永禄10年に戦国武将の河野通宣が作成させた、石手寺刻板（木の板に文字を刻んだ記録）であることが分かり、病に臥せっていた通宣に替わって河野家中を動かしていた久谷地区の国人領主・平岡房実が久谷地区にあった衛門三郎伝承を河野氏の本拠・道後湯築城に伝え、衛門三郎が河野の家に生まれ変わったとして、河野氏と衛門三郎及び弘法大師を結びつけ、河野氏の伊予における宗教的支配の正当性を打ち立てた可能性があると推測した。また、

地域民話研究部門（個人）最優秀賞

日本人と『桜』の伝説について

砂野光咲さん（愛媛・済美平成中等教育学校4年）

◆応募の動機

小学生の頃、「うば桜伝説」という伝説を初めて耳にした。特に伝説に興味がなかった私は、中学2年の冬に、「うば桜伝説」の話を祖母としたことがきっかけで再びそれを思い出し、「うば桜伝説」をテーマに論文を書き上げた後、このコンテストの存在を知り、応募を決めた。

◆内容紹介

県内の桜の伝説（十六桜伝説・薄墨桜伝説・うば桜伝説・お姫桜の吉凶占い）及び県外の桜の伝説（血脈桜・血桜・世間桜・世の中桜・はなさかじいさんの昔話）を調べ、共通点を探した結果、桜はこの世の超次元的なことと人間をつなぐ役割があると信じられてきたこと、伝説には時代とともに変わりゆく性質があるということが分かった。このことから、伝説は、昔の日本人から受け継がれてきた思想のほんの一部分に触れることができるものであるといえる。また、「花咲爺」について柳田国男は、「元は山の神様、神の使いである犬の両者についての民話だったのに、近世にかけて童話化されるにつれて、内容が物語の面白さを重視したものに移り変わっている」と述べた。伝説は、昔の人の精神や思考に限りなく近づける装置である一方で、現代人に都合の良い解釈となるように中身が改変され、後には一度聞いただけでは何を伝えたかったのか分からないといった事態を引き起こしてしまう存在でもある。

◆今後の課題

伝説を理解することは、私たちが、自分自身について深く知ることと同義。これが伝説の魅力の正体である。しかし、多くの人々は伝説を調べることもなく、また興味さえない。それは、伝説の知名度から見て取れる。新しいものにばかり目がくらんで、自分の足元、つまりは根底にある思考回路について全く顧みないというのは、とても危険な行為であるし、日本人として悲しい行為だ。伝説の持つ神秘的な魅力についても多くの人に味わってほしいが、それ以上に、与えられている素晴らしい権利を自ら手放してしまっているという危機感にも気付いてほしいと思う。それゆえ今後の課題としては、伝説を多角的に見つめ、次世代に伝えていくだけでなく、伝説・伝承の「知名度」についても焦点を当て、さらに研究を進めていきたい。

第23回全国高校生創作コンテスト

短歌の部　最優秀賞

徳森大悟さん（鹿児島・ラ・サール高3年）

そばにいてみんなを優しくしたいから半濁点に僕はなりたい

俳句の部　最優秀賞

鈴木萌晏さん（岩手・水沢高2年）

割り箸にごはん一粒春の山

現代詩の部　最優秀賞

僕と乳房

吉田眞子さん（兵庫・神戸大学付属中等教育学校4年）

僕の高校ん時のあだ名は
ちちふさ
漢字にすると乳房
そう　これはちぶさ
僕には無いけど　やかましいわ

ある日の五限　現文
みんなで一行ずつ読むの　あるでしょ
僕が読む行に　あったんです
乳房（ちぶさ）が
僕ホラ思春期だったんで　なんか
さらりと読むのも恥ずかしい気が…
しない？　僕はしたんです
だからワザと間違えて読んだら
僕は乳房に興味が無い　とみんな思う
そう考えて読みましたよ
「輪郭のぼやけた遠山は
まるで流れる乳房（ちちふさ）のようだ」
って　それからです
何だったんでしょうね　あの文
誰かあれ乳房（にゅうぼう）って
読まなかったのかな

高校生向けコンテスト『入賞作品集』を制作

今回のコンテスト入賞作品を掲載した「全国高校生創作コンテスト入賞作品集」を制作、2月下旬に刊行します。短篇小説は佳作までの作品、現代詩、短歌、俳句の3部門は入選まで全ての作品を収録。同作品集は、国学院大学広報課窓口で先着順に無料配布いたします。発送をご希望の方も受け付けますので、希望部数と送付先をご連絡ください。

「『地域の伝承文化に学ぶ』コンテスト入賞作品集」も2月下旬に刊行を予定しています。同作品集もまた、当課で無料配布いたします。

本号掲載の第15回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストのリポートは、作品集に掲載する文章を再編集したものです。詳しくは作品集をご覧ください。

問総合企画部広報課（☎03・5466・0130）

インフォダイジェスト

…在学生　…保護者　…卒業生　…一般　…受験生
内内容　日日にち　時時間　場場所　対対象　申申し込み　料料金　問問い合わせ

大学からのお知らせ

令和元年度の卒業式、卒業証書・学位記並びに修了証書授与について

日 3月22日㈰

[卒業式]

場グランドプリンスホテル新高輪「飛天」

対・時

▶経済学部・法学部・人間開発学部＝10時～

▶文学部・神道文化学部・専攻科・別科＝13時～

[卒業証書・学位記、修了証書等授与]

対・時・場

▶経済学部・法学部＝13時～、渋谷キャンパス

▶文学部・神道文化学部・専攻科・別科＝16時～、渋谷キャンパス

▶人間開発学部＝13時30分～、たまプラーザキャンパス

問総務課（☎03・5466・0111）

国学院大学生協への出資金返還

内生協加入時にお預かりした出資金の返還手続きを開始します。

日 3月5日㈭～

時生協事務所の営業時間内　※5日は11時以降

対今年度卒業生

場・問生協事務所（渋谷・たまプラーザ）（☎03・5466・0165）

※生協事務所の営業時間は生協ＨＰ（http://www.kgucoop.or.jp/）を参照

令和2年度オリエンテーション

内学部・学科・学年ごとに令和2年度オリエンテーションを実施します。在籍確認シール交付、履修相談などが行われます。日程・場所は学内掲示や本学ＨＰなどで確認を。

日 3月31日㈫～4月4日㈯

オープンカレッジ新年度の受講生募集

内4月に開講する44講座の受講生を募集します。特別講座を除く各講座には独自の単位を設定し、累積32単位となった時点で「国学院大学オープンカレッジ修了証」を授与します。講義内容などの詳細は本学ＨＰ（https://www.kokugakuin.ac.jp/general/eventlist/p1）で確認を。

対・料

[入会金]

▶一般＝5000円

▶院友（本学卒業生）、若木育成会会員（在学生保護者など）、本学科目等履修生、他校学生・生徒＝3000円

▶本学学生・本法人教職員＝無料

[受講料（テキスト代含まず）]

▶5回講座＝1万1000円

▶10回講座＝2万2000円

※若木育成会会員、本学の学生・教職員、渋谷区・横浜市青葉区在住者、他校学生・生徒は半額

申前述の本学ＨＰまたはパンフレット（電話・ＦＡＸで請求）で開講講座を確認し、「受講申込ハガキ」または「ＦＡＸ用受講申込書」で申し込みを。申し込み期限は3月23日㈪。

問エクステンションセンター（☎03・5466・0270、FAX03・5466・0394、✉jigyo@kokugakuin.ac.jp）

博物館

料無料

時10時～18時（入館は17時30分まで）、3月16日㈪～19日㈭、4月27日㈪～5月1日㈮は休館

春の特別列品「国学院大学図書館の名品～神の新たな物語―熊野と八幡の縁起～」

内神社・寺院の由来や、神仏の不思議な力である霊験を語る物語を縁起と呼びます。これらは、社寺や人々の信仰に根ざしたものでした。本展では、国学院大学図書館が所蔵する熊野の神々や八幡神（応神天皇）とその母・神功皇后をめぐる縁起絵巻の数々を展示し、物語から中世の神々の姿を見ていきます。

日 3月20日㈮・㊗～5月10日㈰まで

場博物館企画展示室

※博物館関連イベントの問い合わせは☎03・5466・0359

キャリアサポート

学内合同企業説明会・公務員採用説明会

内本学学生を採用する意欲が高い企業・団体の採用担当者からじかに話を伺うことができる合同説明会です。一日で多くの企業・団体と出会うことが出来ます。毎年、この説明会をきっかけに内定を獲得する学生もいますので、業界・企業・職種研究を進めるとともに、自分に合ったオンリーワン企業を探しましょう！

日 3月4日㈬・5日㈭の終日

対 3年生

※いずれも渋谷キャンパスで開催。詳細確認・申し込みはK-SMAPYⅡの「就職／各種面談」→「セミナー申込」から

K:DNA

2020 2

K:DNA——創立138年目を迎えた国学院大学の**遺伝子**…個人・個性を尊重する校風　若いエネルギーが未来を変える

第３回 古事記アートコンテスト

特選に村山さん（東海大）、野田さん（熊本・大津高）

大学生部門 **永想傾慕**
村山凪沙さん（東海大１年）

高校生部門 **伊邪那美命**
野田晟奈さん（熊本・大津高２年）

『古事記』に対する理解や日本文化への関心を促すことを目的とした「第３回古事記アートコンテスト」（国学院大学古事記学センター主催、神道文化会共催）の受賞作品が決定した。

『古事記』の内容に関する絵画やイラストを全国から募る同コンテストは今回で３回目。大学生、高校生の２部門に昨年を上回る394点（大学生部門137点、高校生部門257点）の応募があった。

最も優秀な作品に授与される特選には、大学生部門で村山凪沙さん（東海大１年）の「永想傾慕（えいそうけいぼ）」が、高校生部門で、野田晟奈さん（熊本・大津高２年）の「伊邪那美命（いざなみのみこと）」が選ばれたほか、各部門の入選、佳作、審査員特別賞、団体賞（高校生部門のみ）が**別表（敬称略）**のように決まった。

表彰式が２月９日、渋谷キャンパスで行われ、受賞者に賞状などが贈られた。

表彰式では、針本正行学長が「古典作品は語り継がれて古典になります。絵画を通して具現化したことは、『古事記』の新しい解釈が誕生したと言ってよいのではないでしょうか。『古事記』が現代に生きる古典となったことを実感しました」と挨拶。谷口雅博古事記学センター長（文学部教授）が審査員を代表し、「『古事記』を周りの人たちに絵やアートで広めていただきたい」と期待を込めた。

表彰式に出席した受賞者ら

特選に選ばれた村山さんは「雄略天皇と赤猪子の話を描きたくて応募しました。自分らしく絵が描けたかなと思います」と喜びを語った。

受賞作品は、本学博物館で３月15日まで展示されているほか、全国各地での巡回展示も計画されている。

大学生部門

[入　選]「ヤマトタケル」
鈴木京香（東日本デザイン＆コンピュータ専門学校１年）
「因幡の素兎」潮嘉子（倉敷芸術科学大４年）
[佳　作]「天照大御神」宮本桃衣（哲３）
「天照大御神」本馬彩花（京都市立芸術大学大学院修士課程２年）
「受け継ぐもの」下岡紗耶加（神文１）
[審査員特別賞]
「古事記 神代」長谷川さくら（日文２）

高校生部門

[入　選]「須佐之男降臨」茶之原侑以（広島・安田女子高２年）
「木花咲耶姫の決意」上村沙優理（大阪・吹田東高２年）
[佳　作]「黄泉への誘い」伊藤青葵（埼玉・蓮田松韻高１年）
「出会いと別れ」川上春花（神奈川・東海大付属相模高２年）
「契」山本佳穂（神奈川・東海大付属相模高２年）
[審査員特別賞]
「古事記 検索」阿部麗花（神奈川・東海大付属相模高３年）
[団体賞] 宮崎日本大学高